

主 題：あなたは主のもの

聖書箇所：コリント人への手紙第一 6章12-20節

皆さんは何のために生きておられますか？何のために、何を目的に仕事をしたり、勉強したり、その他いろいろなことを私たちはするのでしょうか？Iコリント9：25にパウロはこのように記しています。

「また闘技をする者は、あらゆることについて自制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。」。今、オリンピックが開かれています。そこに出場するほとんどすべての選手たちは勝利を目指して大変な努力をしていることを私たちは知ります。もしも、彼らが明確な目標をもっていなければ、オリンピックに出場するどころか、その大変な練習や訓練に耐えることさえもできなかったことでしょう。それと同様に、私たちも自分が今何のために生きているのか、また、何を目標とするべきかをはっきり理解していないなら、いろいろな問題や困難があったとき、すぐにくじけたり、挫折してしまうはず。ですから、私たちはみことばをしっかりと見て、神が私に何を期待しておられるのか、何を教えようとしておられるのかということに耳を傾ける必要があるのです。

前回私たちは、教会に託された責任について見ました。教会には非常に大きな責任が与えられていました。それは、(1) 私たちがしっかりと神の教会を治めて行くこと、特に教会のリーダーたちにはそのような大切な責任と同時に、権威が与えられているのです。(2) また、私たちが教会を治めて行くことができるように、また、いろいろな問題に対処できるように、必要な知恵も私たちに与えられています。私たちはその知恵(=みことば)を用いて、教会内に起こるいろいろな問題に対処して行く必要があるのです。それ故に、(3) 私たちは何よりも神の評価を求めてすべてのことを為して行く必要があるのです。このコリント人への手紙を学び始めたときにも話したことですが、教会とは「共通の趣味を楽しむためのクラブやサークル」などではありません。すべてをお造りになった全能者なる神が、この地上におかれた「キリストのからだ」(Iコリント6：15「**あなたがたのからだはキリストのからだの一部であることを、知らないのですか。キリストのからだを取って遊女のからだとするのですか。そんなことは絶対に許されません。**」、12：27「**あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとは各器官なのです。**」)なのです。今から約2000年前、イエスがこの地上に来られたとき、イエスが人々に神という存在を現わし、人々に悔い改めを説き、人間としての模範を示されたように、私たちも今、イエスを鏡としてイエスがなされた働きをなして行く必要があるのです。そのために、教会は存在しているのです。

☆クリスチャンと神との関係とは？

2000年前のコリント教会は多くの問題の只中であつたわけですが、どのような問題を抱えている教会であろうと、どの程度の規模の教会であろうと、いつの時代に存在している教会であろうと、教会が存在する目的、責任は同じです。それは前回見たとおり、イエスがなされたように、神の栄光を現わして行くことです。コリント教会の大きな問題は罪でした。罪が正しくさばかれず、なおざりにされていたのです。しかも、その問題の根本原因は、彼らの無知というよりも、彼らの高慢であり、罪に対する意識の低さが原因だったのです。パウロはそのようなコリント教会に対して、自分たちの置かれている状況をしっかりと理解させようとし、クリスチャンとはどのような者なのか、クリスチャンと神とはどのような関係にあるのかを教えるのです。それによって、コリント教会のクリスチャンたちが、自ら進んで神に対する責任である正しい行動ができるようにと勧めるのです。

今日の聖書箇所から私たちクリスチャンと神とがどのような関係にあるのかと見ることによって、現代の私たちもこの環境にあつて、ますます神から託された責任を正しく知ることができ、その与えられた責任を全うすることができるようにと願います。

I. あなたは主(神)のために生かされている 12-14節

●あなたには自由(=選択)が与えられている

12節で「**すべてのことが私には許されたことです。しかし、すべてが益になるわけではありません。私にはすべてのことが許されています。しかし、私はどんなことにも支配されはしません。**」と、パウロが自分には自由(=選択)が与えられていることを話しています。確かに、このことはパウロがガラテヤ書でも強く語っていることでもあります。かつての私たちは罪しか行なうことができなかつた「罪の奴隷」でした。しかし今は、救われて神の所有物とされたゆえに、私たちには選択があるのです。ガラテヤ5：1, 13「**キリストは、自由を得させるために、私たちを解放してくださいました。ですから、あなたがたは、しっかりと立って、またと奴隷のくびきを負わせられないようにしなさい。：13兄弟たち。あなたがたは、自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕えなさい。**」とあるよう

に、私たちはクリスチャンになって初めて自由に生きて行くことができる者となったのです。だから、この後、パウロはガラテヤ書で私たちがどちらを選ぶか、(1) 肉に従うか、(2) 御霊に従うか、ということで大きな違いがあること (1) 肉の行ないか、(2) 御霊の実か、ということのパウロは教えているのです。私たちはかつての律法の束縛から解放されて自由になりました。しかし、だからと言って、パウロが言うように「すべてが益になるわけでは」ないのです。私たちはたくさんある選択の中で、何がほんとうに価値あるもので、益につながるのかということをしつかりと考え、選択して行かなければならないのです。そのような中でパウロが次に言うのは、

●からだとつながりがあるのは不品行ではなく、主である

13節で「食物は腹のためにあり、腹は食物のためにあります。」という通り、食べ物とお腹は切っても切れない関係にあります。というのは、食べ物は神が私たちのお腹を満たすために与えてくださったものであり、お腹はその食べ物を消化、吸収するために必要なものです。それと同様に、この当時、ある人たちは不品行の罪に対しても同じように考えていたのです。「からだと不品行は切り離せない」と。特にギリシャでは「二元論」という考えが盛んでした。それは、霊は聖いが肉体はすべて罪(みな汚れている)という考え方です。それ故、当時のこの考えに立っていた人たちは、聖い存在である神が人間の肉体をもって地上に来られたという教えを受け入れることができませんでした。「肉体と罪とは切っても切れない関係にあるのだから、罪を犯すことはやむを得ないし、気にする必要もない」と考え、罪に対してどんどんルーズになっていったのです。これはまさしくコリント教会の姿です。そして、教会の内にはいた不品行の罪を犯している者をさばこうとしなかったのです。

確かに、食べ物とお腹とは切っても切れない関係にあります。ある意味、この二つは運命共同体であると言ってもいいでしょう。パウロはそのことをこのようなことばで表現しています。「ところが神は、そのどちらをも滅ぼされます。」(13節)と。この「滅ぼされる」と訳されていることばは「無益にする」という意味合いが強いのです。これは、確かに神はいつか必ず救われた私たちのからだを、復活後のイエスと同じように「栄光のからだ」に変えてくださいますが、その中にあるお腹を滅ぼされるわけはありません。黙示録を見ると、2:7「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者に、わたしは神の楽園にあるいのちの木の實を食べさせよう。」、22:2「都の大通りの中央を流れていた。川の兩岸には、いのちの木があって、十二種の実がなり、毎月、実ができた。また、その木の葉は諸国の民をいやした。」、22:14「自分の着物を洗って、いのちの木の實を食べる権利を与えられ、門を通過して都には入れるようになる者は、幸いである」とこのように教えられています。つまりパウロが言いたかったことは「食べ物やそれを消化するためのお腹はいつか役目を終えるときが来るような運命共同体であるが、からだと不品行の罪とはそうではない!」ということなのです。なぜなら、からだは不品行の罪を犯すためにあるわけではありません。私たちのからだは主(=神)のためにあるのです。私たちのからだと密接なつながりがあるのは不品行ではなく、主です。不品行であろうと姦淫であろうと、罪はやがて必ずさばかれ滅ぼされますが、私たちのからだはそうではありません。13c, 14節にあるように「からだは不品行のためにあるのではなく、主のためであり、主はからだのためです。:14 神は主をよみがえらしましたが、その御力によって私たちをもよみがえらせてくださいます。」と、私たちのからだは変えられるのです。神の御力によってよみがえらせてくださり、永遠を神とともに過ごすのです。

私たちは神のために生かされているのです。不品行や様々な罪を犯すためでもなければ、自分の欲望を満たすためでもありません。神を信じクリスチャンとされた私たちはもうすでに神の所有物ですから、神に喜ばれることをしようと願うはずで、そのことについてヨハネはこのように教えています。Iヨハネ3:1-3「私たちが神の子どもと呼ばれるために、——事実、いま私たちは神の子どもです。——御父はどんなにすばらしい愛を与えてくださったことでしょうか。世が私たちを知らないのは、御父を知らないからです。:2 愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。:3 キリストに対するこの望みをいだく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。」、このように救われたクリスチャンは自分が何のために生かされているのかをしっかりと考えて、神が喜んでくださることを知ろうと求め、そのように歩もうとするはずで、ヨハネはさらにこの後でこのように教えています。Iヨハネ5:3「神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません。」。あなたは何のために生きておられますか? 自分のためですか? 自分を喜ばせるためですか? それとも、神を喜ばせるためでしょうか?

II. あなたはキリストの一部分 15-18節

パウロが教えたクリスチャンと神との関係の二番目は、救われた私たちはキリストの一部分であるということです。主のために生かされている私たちはもうすでにキリストのからだとされているのです。

●あなたはキリストのからだであって、かしらはキリストである

I コリント 1 章でパウロは教会の分裂を「キリストの分裂」(I コリント 1 : 13 「キリストが分割されたのですか。あなたがたのために十字架につけられたのはパウロでしょうか。あなたがたがバプテスマを受けたのはパウロの名によるのでしょうか。」)と言ったように、私たちクリスチャンは、イエスを信じて救われたその瞬間に、キリストのからだの一部分となったのです。このキリストのからだとは公同教会のことです。そのことはコリント教会のクリスチャンたちは知っていたはずですが、15 節に「あなたがたのからだはキリストのからだの一部であることを、知らないのですか。」とあるのは、6 章の前半にもあったように反語的表現です。あなたがたは知っているでしょう！と言うのです。私たちは神によって召されたゆえに、今キリストの一部分なのです。I コリント 12 : 27 でも「あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとは各器官なのです。」と教えられています。救われて神の子とされた私たちは例外なく、皆、キリストの一部分なのです。そして、そのからだのかしらはキリストご自身です。コロサイ 1 : 18 に「また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。」とある通りです。そのことはエペソ人への手紙の 4, 5 章でも教えられています。(4 : 15 「むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。」、5 : 23 「なぜなら、キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。」)

2000 年前に、神がイエスを通して人々にメッセージを伝えられたように、今、神は私たちを通して神の働きをしようとなさっておられるのです。そのような私たちが「何をしてもよい！」存在のほうはありません。残念ながら、コリント教会のメンバーたちはこの事実の重み、責任の重大さを十分に理解していなかったのです。イエス・キリストを信じてクリスチャンになった者は、自分がキリストの一部分とされたことに対する感謝や、その重責を感じるはずですが、それゆえに、救われたクリスチャンが「神に従いたくない」というのは明らかに問題であり、決して当時のコリント教会のように、その問題をそのままにしておくべきではないのです。それどころか、彼らの一部の者は遊女と関係を持つ者もいたようです。確かに、コリントの町は町全体が性的な罪に溢れていたのですが、パウロはそれがいかに大きな罪であるかを、創世記のことば(2 : 24 「それゆえ、男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。」)を引用して説明しているのです。15b-17 節「キリストのからだを取って遊女のからだとするのですか。そんなことは絶対に許されません。:16 遊女と交われば、一つからだになることを知らないのですか。「ふたりの者は一心同体となる。」と言われているからです。:17 しかし、主と交われば、一つ霊となるのです。」、創世記の箇所は夫婦の関係について教えられているのですが、聖書には、家族の中で、いや如何なる人間関係の中でも夫婦の関係こそが最優先され、それに勝るものは何もないことが一貫して教えられています。ですから、この箇所はパウロがその教えを逆手にとって、このようなすばらしい恵みが与えられているにも関わらず、からだを汚すような不品行を行なうことは、自分に与えられた恵みを台無しにする行為だと言っているのです。18 節に言われている通り、結婚した夫婦間以外で性的な交渉をもつということは、他の罪とは一線を画する特別な罪なのです。18 節「不品行を避けなさい。人が犯す罪はすべて、からだの外のものです。しかし、不品行を行なう者は、自分のからだに対して罪を犯すのです。」

いかがですか？救われた皆さんは今、自分がキリストのからだの一部分であるという意識を常にもっておられますか？たとえば、私たちが何か罪を犯すとき、それはキリストのからだに罪を犯させてしまうという意識をもっておられますか？神が最も嫌う罪を私たちが犯すとき、イエスにどれほどの思いをさせてしまっているかということを考える必要があるのではないのでしょうか？神からすばらしい恵みをいただいておりますが、その恩を仇で返すようなことをしていることを私たちは意識しているのでしょうか？もしそのような罪があるなら、すぐにその罪を悔い改めるべきです。

●「主と交われば、一つ霊となる」とは？

ここで「交わる」と訳されていることばは、「常に行動を共にする」とか「親密な交わりをもつ」という意味です。ですから、あなたがますますキリストを意識してキリストを喜ばせる歩みをして行くなれば、丁度夫婦がそうであるように、あなたはもっともっと神とのすばらしい関係に入って行くことができると教えているのです。ですから、私たちはいつも、心の中でキリストを意識して生きる必要があるのです。

Ⅲ. あなたの内には聖霊がいる 19-20 節

クリスチャンである私たちは今、主のために生かされており、キリストのからだとされているだけでなく、聖霊なる神の宮なのです。

●奴隷であったあなたを解放するために、支払われた代価とは？

19-20 節「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。:20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。」。ここでパウロは非常に興味深いこ

とばを使って大切なことをコリント教会のメンバーに教えようとしています。私たちは神によって「**買い取られた**」と言います。ここまでパウロは「からだ」ということばをテーマに語ってきました。(1)からだは主のためにあること、(2)それどころか、私たちはキリストのからだの一部分であること、(3)さらに、私たちのからだは「**聖霊の宮**」でありもはや自分自身のものではないのです。この箇所では語られていることは、非常にインパクトのあることです。というのは、自分たちのからだは神の宮であり、神の住まいであると言うのです。当時の人たちからすると、神は自分たち人間とはかけ離れた存在で、そのような神が自分の内に住まれるということなど考えられないことだったのです。

もう一つは20節に「**代価を払って**」とありますが、これは当時、奴隷に対して使われる表現でした。みことばは、かつての私たちは奴隷であったことを教えています。ヨハネ8：34に「**イエスは彼らに答えられた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。罪を行なっている者はみな、罪の奴隷です。」**」とあり、Iコリント7：23にも「**あなたがたは、代価をもって買われたのです。人間の奴隷となつてはいけません。**」とあるように、かつての私たちは罪にがんじがらめになっていた奴隷だったのです。自分の力ではそこから抜け出すことなどできない、そのような状態にあった私たちを神が救い出してくださったのです。当時、奴隷がその主人から解放されるためには、お金を支払って買い取られる必要があったのです。奴隷は主人の持ち物であって自分自身でお金を稼ぐことはできなかったのです。第三者から買い取られることによって解放されたのです。同様に、私たちを買い取ってくださったのが神です。自分ではどのようにもできなかった罪という大きな負債(=借金)を神が肩代わりしてくださったのです。それが、イエスの十字架であり、イエスのいのちなのです。罪のために滅ぼされて当然の私たちを救うために、神が支払ってくださろうとした代金は、この世界で最も高価で価値ある神のいのちだったのです。だから、神は人となってこの地上に来てくださったのです。それがイエス・キリストです。

そのイエス・キリストを自分の神として信じる決心をした者は、ローマ6：22が教えるように、「**しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり、聖潔に至る実を得たのです。その行き着く所は永遠のいのちです。**」と、神の奴隷とされたのです。神によって買い取られたあなたは、今、神の奴隷なのです。

●救われたあなたに神がしてくださったこととは？

それは聖霊による証印です。エペソ1：13-14を見ましょう。「**またあなたがたも、キリストにあって、真理のことば、すなわちあなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことによって、約束の聖霊をもって証印を押されました。：14 聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証であります。これは神の民の贖いのためであり、神の栄光がほめたたえられるためです。**」。イエス・キリストを信じ救われたあなたの内には聖霊なる神が入ってくださっているのです。だから、あなたは神に喜ばれようとするし、神の栄光が現わされることを何よりも願う者となったのです。

同じように、パウロも今日の箇所の初めに言っています。6：12「**すべてのことが私には許されたことです。しかし、すべてが益になるわけではありません。私にはすべてのことが許されています。しかし、私はどんなことにも支配されはしません。**」。彼はいやいやとか、誰かに強制されていろいろなことをしていたのではないのです。すべてのことを率先して自ら進んで行なっていたのです。それは、神が自分のためにしてくださったことをいつも覚えていたからです。神と自分がどのような関係にあるのかということをよく理解していたからなのです。

あなたは(1)自分が主のために、主によって生かされているということをいつも意識しておられますか？また、(2)自分が今、キリストのからだの一部分であり「私のすることは完全に聖であられる神に対してしていること」と理解しておられますか？最後に(3)神があなたを救うためにどれほど大きな犠牲を払い、あなたを導こうとしてくださっているかを覚えて、価値ある選択をしておられますか？コリント教会は残念なことにそうではなかったのですが、パウロの教えと導きによって悔い改めて行きました。私たちもまた同様です。